

「忘れもの」

飛騨御坊真宗教化センター長 三島 多聞氏

もう、四十年前の事です、高山から名古屋に移住した方から、母の遺骨を高山にあるお墓に納骨したいので立ち会って欲しいと連絡がありました。

約束の時が来て、車三台で家族、親戚の方々十四、五名がお寺の前に着られました。全員、黒の礼服を着ており、女性は花や線香、ローソクを手にし、男性は車のトランクから六角の鉄の棒、縄、スコップなど取り出しました。まるで大ゲンカの出入りのようです。墓地について判りました。大きな墓で、墓石の本体を取り外し、中の石をズリ動かすと、土台の石の中央に穴があいていて、そこから納骨する仕組みになっていました。持ってきた道具を使い、三十分程かけて大の大人が少しずつ墓石を動かしました。いよいよ納骨の時、主人が奥さんに「ばあさんの骨は？」と言うと、奥さんはびっくりした顔をして、「あんたが持って来たんでないの」と言いました。完全にばあちゃんのお骨を名古屋に忘れて高山に来ていたのだった。一瞬、立ち会った全員が、何のためにここにいるのか意味を失い、途方にくれて、息をのんだ様子でした。

勝手知ったる我が家の墓、準備万端整えて来たが、肝心の遺骨を忘れては、納骨が納骨になりません。

ここで思いました。人生と同じ事だ。仕事も健康も、また家族の事も、注意を払って生活しているけれど、何が生きている本体なのか忘れていては、人生が人生にならないのではないか。

納骨はいずれ日を改めて出来ることですが、人生は一回限りですので、返しができません。

母親の納骨に当たり、ご主人はその事に気づいたでしょうか。不思議と今でも思い出し、自分の今のあり様を振り返り、念仏申しています。